

## 書評

Noam Chomsky: *Language and Mind*.  
1968, Harcourt Brace.

山田 泰 司

本書は、目下のところ、世界で最も注目されているアメリカの言語学者チヨムスキーが、一九六七年一月、パークレーのカリフォルニア大学でおこなった三回の講演をもとにして編まれたもので、彼のまとまった著作のうちで、おそらく最も新しいものである。彼の言語理論は難解といわれているが、これは講演集であるだけに、比較的近づきやすい形で、彼の理論の概要をうかがい知る機会を与えてくれる。

もちろん、彼の言語理論を本格的に紹介または批判するためには、専門の言語学者をまたなければならぬであろう。しかし、かつてフロイドの精神分析理論がそうであったように、チヨムスキーの言語理論が、早くも、今日の知的風土の重要な一部をなしているかに思われる以上、筆者のような言語学には全くの素人にも、素人なりの理解があつてしかるべきではないのか、という半ば義務感にかられて、敢えて、書評、いや粗雑な

解説の筆をとった次第である。解説にすらならないで、筆者ひとりのための覚え書に終るかも知れないことを、おことわりしておかねばならない。

本書の全体を構成する三回の講演には、全部、「精神の研究に対する言語学の寄与」という表題がつけられている。これは「言語の研究が、われわれの人間性の理解にいかなる寄与をなしているか」という問いに、問題の焦点を置くという彼の意欲的姿勢を物語るものといえよう。彼の言語理論が、従来の狭い意味の言語学の域をこえて、少なくとも、心理学および哲学の領域に及ぶものであることが、これによって示唆されている。言語の本質は何か、言語がいかなる点で人間の精神過程を反映し、思考の流れと性格を形成するか、という古典的な問題を考察する場合、在来の言語学、哲学、心理学という学問の垣根は、かなり不自然なものならざるをえない、と彼自身述べている。

第一章において、チヨムスキーは、自らの言語理論を近代ヨーロッパ思想の中に位置づけようと試みている。彼の言語理論は画期的なものだ、といわれているが、その原理は突然変異ではない。彼はその原形を十七世紀の合理主義哲学に見出す。今日の知的風土が、十七世紀ヨーロッパのそれに、奥深い点で、よく似ていることに、彼は注目している。とくに重要なのは、十七世紀哲学が、今日と同様、オートマトン(自動機械)の可能性について大きな関心を寄せていたという点である。デカルトは動物をオートマトンと見なした。人間もまた、他の動物と同じく自動機械にすぎないのであるか。ロボットをいかに精

巧にし、それに人間と同じ程度に完全な発声器官を与えてみても、人間のようには、場面に応じて理性的言語を使用することはできないであろう。人間は、肉体においては、他の動物と同様、一つの自動機械ではあるが、理性的な言語使用能力だけは、物質的な機械から引き出すことができない。そこで、人間には、非物質的な理性ないし精神の存在を認めなければならぬ、とデカルトは考えた。『方法序説』のこのような議論は、現代の心理学やサイバネティクスについての論議を先取りしている感がある。十七世紀の知的風土が今日のそれと、重要な点で似ているというのは、チョムスキーによれば、このような意味合いにおいてである。

近代における言語理論の発展の経過を跡づけるにあたって、チョムスキーは、十六世紀末、人間の知能の本質について、すぐれた研究を発表したスペインの医師ファン・ウワルトの説を紹介している。ウワルトは知能の三つの段階を区別した。最も低い段階は、五感によって伝えられるもの以外、何も受けつけない「従順な知能」の段階である。第二の段階は、自らの内部の力によって、新しい考えを生み出し、それにふさわしい、目的の新しい表現方法を見出すことのできる普通の知能の段階である。そして、経験論の限界内にとどまる第一の知能と、完全な生成能力をそなえた第二の知能との差異こそ、動物と人間とのちがいののだ、とウワルトは主張した。

ウワルトのいう知能の第三段階とは、それによって、かつて見られたことも、聞かれたことも、書かれたことも、いや考え

られたことすらない、微妙で驚くべき、しかし真実なことを語る、普通の知能をはるかに超え、時には狂気の趣きさえある最高の知能で、これは独創的想像力に属する。ロマンティズムの勃興とともに、関心は、この第三段階の知能へ移ってゆく。しかし、人間一般の言語能力について考える際に、関連があるのは、ウワルトのいう第二段階の知能、すなわち、人間をけだものから区別する普通の言語使用能力である。そして、この能力が、訓練や経験を超えて、新しい考え、新しい表現を見出し、てゆくという「創造的な面」をもっているという仮定である。

この「言語使用の創造的な面」についての議論は、三つの重要な観察にかかっている。第一は、普通の言語使用が革新的（イノヴェイティヴ）である、ということである。革新的とは、場面や必要に応じ、いままでも一度も用いたことがない発話を作りだせると同時に、いままでも一度も耳にしたことのない発話でも理解できるという意味である。これは当り前のことではあるが、人間の言語知識を刺激に対する学習された反応の蓄積としてとらえる行動主義的言語理論によって見落され、しばしば否定されてきた点である。第二は、普通の言語使用が、外的にせよ、内的にせよ、刺激の支配を受けないという点である。言語が、普通の人間にとっても、自己表現の道具として役立ちうるのは、このように刺激の支配から自由であるからである。第三の点は、普通に用いられる人間の言語が、意味のまとまりをもち、場面・情況にふさわしい、ということである。まとまり、ふさわしき、とは、どういうことを明確にいうことはできないにし

ても、これらの特徴が意義ある観念であることは疑えない。われわれは、普通の言語使用のすがたを、狂人のたわごと、または、でたらめにプログラムされたコンピュータのアウトプットから区別することができる。

以上あげた、人間の言語の三つの特性は、とりもなおさず、人間の思考の特性でもある。このような特性を、デカルトは機械論的に十分に説明することができなかった。それはともかく、このような合理主義的言語観が、十七世紀の他のさまざまな面での発展と合併されて、哲学的または普遍的文法（フィロソフィカル、またはユニヴァーサル・グラマー）として知られる、言語構造についての一般的理論へと発展した、とチョムスキーはいう。

不幸なことに、この哲学的文法がどのようなものであったかについては、今日あまり知られていないし、またこれについて言及が稀になされても、その多くは誤解に基いている。すなわち、哲学的文法は、ラテン語を範とするものだから、規範的であるとか、音声に興味を示さない、等々の誤った非難をうけている。ところが、実際は、哲学的文法の代表的書物であるポール・ロワイヤル文法（一六六〇年）を見てもわかるように、それは当時の学問語であるラテン語を母国語をもって代えようという運動に沿って、フランス語で書かれた。ラテン語は不自然で、ゆがめられた言語で、デカルト学徒たちが重んじた明晰な思考と常識的な談話にとって有害な言語と考えられたからであった。哲学的文法に加えられる規範的だという非難も、当たら

ない。慣用的語法について、とやかく言うことは、文法学者の仕事ではない、ということとはよく理解されていた。哲学的文法家たちが目ざしたのは、言語的事実を、言語の本質、そして最終的には、人間の思考の本質に関する仮説に基いて説明することであった、とチョムスキーはいう。哲学的文法家たちは、言語的資料が、極めて一般的性質をもつ精神の奥深いプロセスに關係のある証拠として用いることができる限りを除いては、資料の蒐集にほとんど興味を示さなかった。哲学的文法は、文法学者の仕事で、具体的な言語資料を記録し系統だてることだと解する記述的伝統に反撥して起こったものであった。

チョムスキーは、現在のところ、ポール・ロワイヤル文法について決定的な評価を下す段階にないことわりながらも、そこに繰り返して現われている二、三の主題を紹介している。チョムスキーによれば、ポール・ロワイヤル文法の革新の一つは、それ以前の文法が、主として語類（品詞）と屈折についての文法であったのに対して、文法的単位として句（フレーズ）の概念が重要であることを認めた点にあるという。一つの句は複合観念に相当し、一つの文はいくつかの連続した句に分析され、そして、それらの句は、さらにまた、いくつかの句に再分され、遂に単語のレベルに達する。こうして問題の文の「表面構造」（サーフェス・ストラクチャー）と呼べるものが得られる。ポール・ロワイヤル文法家たちは表面構造の分析をおこなった最初の文法家らしいのであるが、彼らは、こうした分析だけでは不十分なことに気がついた。表面構造の分析によって、文の音

声的解釈は決定できるが、意味の解釈をきめるには、表面構造の背後にあって、これを統率し、まとめあげていると考えられる「深層構造」(ディープ・ストラクチャー)という、文の表面には現われていない、より抽象的な構造を仮定してみなければならぬ、と考えたとチョムスキーは説明している。

この深層構造は、ある種の心的操作——現代の術語でいえば、文法的変形——によって表面構造と関係づけられている。ポール・ロワイヤル理論を論理的に押し進めるなら、ある言語の文法は、深層構造と表面構造間の変形関係を特色づける規則の体系を含んでいなければならないことになる。話し手の文法は、適切に関係づけられた、無限多数の深層・表面構造を生み出す有限の規則体系を含むはずである。ウィリアム・フォン・フンボルトのことに従えば、話し手は有限の手段を無限に使用する。こうした考え方が、今日、発展され、精密化されつつある生成文法の概念の原形になっている。ところが、このような概念は、フンボルトのロマンティックなヴァリエーションを最後として、十九世紀後半に近代言語学が発達するにつれて、ほとんど跡かたもなく消え失せてしまっていた、とチョムスキーは述べている。

ポール・ロワイヤル文法理論と、現代の構造・記述言語学との関係はどうか。構造言語学は、その分析を、表面構造に限定した。現代の構造言語学の土台を礎いたソシュールは言語学的分析の正しい方法は、分割と分類だけであると主張し、現代の構造言語学は、これを言語分析に必要、かつ十分な方法と考え、

その限定を忠実に守ってきた。明らかに、このような分類学的分析では、哲学的文法にいう意味での深層構造が、その考察圏内に入る余地がなかった。さらに、ソシュールは文形成のプロセスは言語材料(ラング)の体系に属さない以上、本来の意味での言語学の領域外に置かれる、という見解をしばしば発表した。この見解によれば統語論は、言語学にとってどうでもよいものになる。そして、実際、構造言語学では統語論上の見るべき仕事は、ほとんどなされない結果になったのである。

十九世紀科学の偉大な業績の一つである比較印欧語研究の目ざましい成功とともに、哲学的文法の弔鐘が鳴らされた。ホイットニー、ソシュールなどによって表明された不毛で全く不十分な言語観は、言語研究の当時の段階では、まさしくふさわしいものであることがわかった。構造言語学も同じ知的わく内で進展し、相当の進歩をとげた。構造言語学は、利用できる知識の範囲を大幅に広げ、資料の信頼性を測り知れないほどに高めた。それは言語についての論述の正確さを、全く新しいレベルにまで高めた。しかし、哲学的文法——一般文法理論——の伝統を軽視したことは、結局、言語研究にとってマイナスであった、とチョムスキーはいう。

このように、言語研究には二つの伝統があった。一つは、十七世紀からロマンティズムまで栄えた一般文法の伝統であり、他は、それ以後、少なくとも一九五〇年代の初期まで、約一世紀にわたって言語研究を支配してきた記述・構造言語学の伝統である。記述・構造言語学が言語の詳細な事実に興味を

抱いていたのに対し、一般文法は同程度に抽象的・一般化に没頭していた、と云ってよい。今こそ、これら二つの伝統を結合し、その各々の業績からくみとり、両者を綜合した研究を進展させるべき時期が到来している、ということばで、チョムスキーは第一回の講義を結んでいる。

以上のように、チョムスキーは構造言語学についても正当な評価を与えているが、彼の共感が示しているのが、十七世紀以来の一般文法理論であることは明らかである。彼は、自らの言語理論が十七世紀の合理主義哲学者たちの言語理論を継承するものである、と見ているのである。

第二回の講義では、チョムスキーは彼の文法理論の最近の発展状況を報告している。その前置きとして、言語現象は、われわれにとって、あまりにも身近な精神的現実であるために、それから適当な心理的距離を置くことが難しく、皮相な説明で満足してしまう危険が多分にあることを強調している。言語と精神に対する構造言語学的、行動主義的アプローチの本質的欠陥は、説明が皮相で即物的でよいと信じた点にある、という。それゆえ、言語の知識というものが、習慣構造であるとか、連想の網であるとかいうふうになんて信じこんでしまったのである。

ある言語を習得した人は、音声と意味とを、ある特定の仕方に関係づける規則の体系を内面化したことになる。ある言語の文法を作る言語学者の仕事は、この内面化された体系に関する仮説を提出することである。しかし、特定言語の文法が作られ

るとき、そのあり様を規定する原理というものはあるはずである。英語、フランス語、日本語といった具体的特定言語のもつ見せかけの多様性にもかかわらず、およそ人間の自然言語である限り、共通に具えていなければならない、普遍的型、または特性といったものがあるのではないか。これを規定しようとするのが一般文法の仕事である。特定言語の文法は、一方ではその言語の資料との照合を強いられ、他方では、一般文法の規定するところに即することを迫られる運命にある。

以上のような前置きをして、チョムスキーは、生成文法の問題点を解説している。それは統語部門と、音韻部門と、意味部門に分類できるが、音韻部門は筆者の理解に余るので省き、主として、統語部門から二、三の例をあげるにとどめる。

彼が扱っている問題の中で、言語学の素人にとっても興味があるのは、文のあいまいさという問題である。たとえば、

(a) I disapprove of John's drinking.

という文は、ジョンが飲むという事実をさしているのか、それとも飲みっぷりをさしているのか、あいまいである。どちらの意味にとるべきかは、表面構造には示されていない。しかし、この文をつぎのように拡張すると、あいまいさが解消する。

(b) I disapprove of John's drinking of the beer.

(c) I disapprove of John's excessive drinking.

この二つの文は、それぞれ一つの深層構造をもつので、あいまいさがない。ところが、英語の文法では、深層構造のちがう二つの文を組合わせて、

(d) I disapprove of John's excessive drinking the beer. という文を作ることは許されない。すなわち、(d)は非文法的な文である。(d)が、なぜ英語の文法から逸脱しているかについて説明しなければならぬ。この場合、特定文法のレベルでは、二つの深層構造について、どちらか一方を選ぶよう指定し、各々の場合、(b)か(c)のどちらかにだけ拡張を許すという文法的規則を設けることによって説明がつくであろう。英語を知っている人が、この規則を心得ているからこそ、(d)が非文法的であり、(a)があいまいな文だと直感的に感ずるので、と説明することができよう。さらに、われわれは、もっと深いレベルの説明にまで進んでゆくことができる。すなわち、このような規則を自分のものにしたのは、精神のどのような構造によるのか、その構造はどのような一般性をもっているのか、を問うこともできる。これは、一般文法にかかわる問題である。(序でながら I disapprove of John's excessive drinking of the beer は、文法的に正しい文である。)

もう一つ、あいまいな文をあげれば、

(e) John kept the car in the garage.

という文は、車庫に車をしまっけて置いたのか、車庫にある車は(売らないで)とって置いたのか、あいまいである。ところが、この文から

(f) What (garage) did John keep the car in?

という疑問文を作れば、この文は、車庫の中の車をさすことは不可能になり、あいまいではなくなる。

(g) John kept the car that was in the garage.

という文からは、(f)のような疑問文は作れない。

(h) What garage did John keep the car that was in?

という疑問文は英語ではない。一般に the car that was in the garage のような複合名詞句から、文法的変形によって名詞句 (the car) を抜き出してきて、疑問文を作ることには許されない。これは英語のみならず、あらゆる言語に通ずる普遍的特質(リングウィステック・ユニヴァーサル)であるように思われる、とチョムスキーはいう。

ここで、注意しなければならないのは、チョムスキーが文の意味の解釈をする際に、場面とか文脈とかを、考慮に入れていないことである。(a)も(e)も、場面が与えられれば、あいまいさは消えるであろう。しかし、チョムスキーは、現在のところ、あくまで文の構造に即して意味を考えている。

意味部門については、「もし文法が話し手・聞き手の十分な言語能力を扱うことになれば、それは意味解釈の規則をも含まねばならないけれども、文法のこの面については、まだ、ほとんど知られていない」といって、「ごく簡単に扱い、ただ表面構造のある面が意味の解釈にも関連があることを示唆するにとどめていく。

第三回の講演は、哲学者、心理学者、言語についての、人類学者、生物学者などの最近の学説を批判しながら、言語が人間特有のものであることを強調し、言語研究が人間の精神過程の解明に通ずるものであることを、改めて主張したものである。

とくに、彼の場合、言語学が認識心理学としてとらえられているところに特徴がある。ただ、一箇所、気にかかった点を指摘すれば、一方では「精神が、その本有的特性として、われわれが一般文法と呼んできた一般的言語理論をもつて、いると仮定する」(傍点筆者)といいながら、他方では、「ある言語の文法は、

提示された言語的資料から、子どもによって発見される」(傍点筆者)といっている点である。このあたりの矛盾をどう解くかが、今後、彼にとって一つの課題になるように思われる。

(一橋大学助教授)